技の継承

～こんちきちんから学ぶ祇園祭千年の秘密～

1 班メンバー

リーダー：**大友 葵**（京都大学文学部 4 回生）

渡邉 翔太（安田産業株式会社 地球環境室）　**古田 理子**（株式会社 髙島屋京都店）　**豊島 拓**（学校法人立命館 総務部社会連携課）

瀬尾 彩夏（京都造形芸術大学キャラクターデザイン学科 1 回生）　**石鍋 大輔**（京都造形芸術大学 キャラクターデザイン学科 准教授）

テーマの背景・目的

『こんちきちん』で親しまれているお囃子における「技の継承」から 1150 年続く持続力についての知恵を学ぶ。

調査方法

技の継承者へのインタビュー

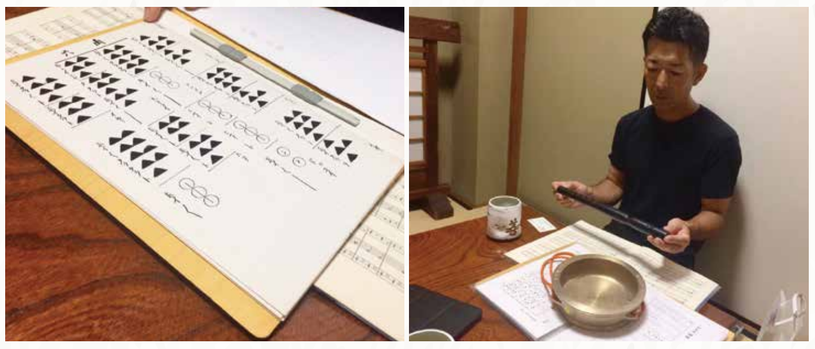
第 1 回：7 月 25 日　長刀鉾保存会囃子方　木村幾次郎 氏

第 2 回：8 月 24 日　北観音山保存会　囃子方幹事　石田篤彦 氏

第 3 回：9 月 11 日　鷹山保存会　副理事長・囃子方代表　西村健吾 氏

【長刀鉾保存会】

【北観音山保存会】



【鷹山保存会】

内容・結果

お囃子の起源は室町時代（1336 年 -1573 年）にまで遡るとされており、当時の資料は多くは残っていないが「能楽」が派生したものなど諸説ある。今回の調査では、3つの保存会の方への取材から、お囃子における「技の継承」、そして祇園祭に対する考え方の調査を行った。

＊共通点
- 「祇園祭のために生きている」という強い意志
- 町（町内）のプライドと考え方を貫いている。
- お囃子には太鼓・鉦・笛で構成される独自の譜面が存在する。

＊相違点
- 譜面の表現方法
  - → 「▲」や「○」など譜面に使用される記号は概ね共通しているが、記号の意味合いには鉾山によって微妙な差異がある。

＊継承の変化
- 継承者の環境（距離や時間）の変化
  - → 進学や就職により担い手の住環境が町外に移行
  - → 町外からの参加も可能になってきた（面接等を実施）
- 記録方法の多様化（音声・映像での記録が可能になった）
- お囃子の習得方法（教育方法）
  - → 「聞き覚え」のみではなく、譜面も活用しながら指導。

＊継承の不変
- 先人からバトンを受け取りながら同時に次世代に継承している。
- 楽器の構成、記譜法の基礎
- 口授伝承を基本としている。

考　察

■ グループテーマと関連する SDGs の項目

上記の調査結果から、祇園祭のお囃子において実践されてきた「技の継承」には、
SDGs「4. 質の高い教育をみんなに」・「11. 住み続けられるまちづくりを」の 2 項目が深く関わると考えた。

■ 1150 年間での調査対象の変化

本調査のテーマである「技の継承」方法の変化として、以下の 2 点が挙げられる。
①昔は各町内の人間のみで運営していたが、現在は町外出身者でも担い手として囃子方に参加出来るようになってきている。
②お囃子の伝承方法は、昔は音を耳で覚える「聞き覚え」だったが、現在は譜面を活用してより具体的に指導している。

■ 1150 年間で変化しなかったところ

祇園祭の囃子方には、太鼓・鉦・笛からなる変わらぬ楽器の構成と独自の譜面が昔から継承されてきた。長刀鉾の囃子方ではこの譜面を五線譜に変換した楽譜も作成されたが、従来の記譜法による譜面の方がリズム感や間の取り方などが分かりやすいため実用化には至らなかったという事例があった。また、北観音山の取材時には、鉾周辺の町並みが時代と共に変化していくが何百年もの間、鉾山は毎年同じ時間・同じ場所・同じ姿でそこにあり続けてきたことから「タイムマシン」に例えられ、不変の価値の象徴として誇らしげに語られていた。

提言・まとめ

今回の調査全体を通して、囃子方の間口が広がりりつつある一方で、入会するためには何があっても続けていく覚悟が必要である点は昔から変わらず、旧来の囃子方として継承を担う人と新たに囃子方を志す人ともに祇園祭への強い意思が共有されていることがわかった。1 班では、お囃子の「技の継承」における実践から、強い意志の下で質の高い教育が行われてきたことと、時代の変化に合わせて囃子方の受け入れ体制や継承方法を柔軟に変化させてきたことが、持続力の秘訣であると考える。